

「モリイク」は、コープ未来の森づくり基金が、森と人、森づくりと人をつなぐ目的で発行している冊子です。

コープ未来の森づくり基金レポート

# モリイク

MORI - IKU

森に行こう。  
森で育とう。  
森を、育てよう。

vol.01  
Mar. 2011

編集後記

レジ袋の有料化に端を発し、2008年にスタートした「コープ未来の森づくり基金」もスタートして3年が経過しました。この間、基金では「コープの森植樹活動」「環境団体助成」「学習活動」を中心に取組をすすめてきました。

コープさっぽろのお店でレジ袋を辞退すると0.5円が基金に積み立てられ、みなさんの毎日のお買い物で北海道の森づくりに広く役立てられています。

北海道の森の価値は、そこに住んでいるからこそ気がつかない「宝物」。この宝物は、触れて、育てて、使ってこそ価値が生まれるもの。私たちの目指す森づくりは、木を植えるだけでなく、使うことまで考えることを大切にしています。

そのためにはまず「森に行き、森に触れる」ことから始めよう。森に行き、森を育てることを通じて、人、街、社会、が育つ。

「モリイク」というタイトルにはこんな想いを込めました。

今後、基金では「北海道の森づくりのプラットフォーム」となるべく、さらなるステップアップを目指します。私たちの宝物である北海道の森づくりを、行政、団体そして北海道民の皆さんと一緒に取り組んでいきたいと思ひます。今後も基金の取組へのご協力、参加をよろしくお願いいたします。

モリイク vol.01 2011年3月発行  
発行元/ コープ未来の森づくり基金  
〒063-8501 札幌市西区発寒11条5丁目10番1号  
TEL/ 011-671-5651 (コープ未来の森づくり基金事務局)  
制作/ LLCのこたべ

■コープさっぽろは環境マネジメントシステム「ISO14001:2004」に従って、環境マネジメントシステムを確立し、実施し、維持し、継続的に改善しています。

■コープ未来の森づくり基金は、組合員さんのノーレジ袋へのご協力で支えられています。

この冊子は環境に配慮して大豆油インクおよび100%再生紙を使用して作成しています。



# モリイイク

小さな命のつらなり。  
その先には自分がある。未来がある。  
森に続く小径がささやくのはそんなお話。  
聞きこぼしてはいけない、大切なお話。  
さあ、手をつないで森にいこう。

## \* contents \*

- \*02 コラム 森づくりのトレンド  
未来のための市民による森づくり
- \*04 特集 苫東・和みの森  
コミュニティフォレストへ行こう
- \*09 コラム 北海道の森のすばらしさ  
北海道の森はたからもの
- \*10 親子で楽しむ森のページ  
森のキレイキモイ
- \*12 コープ未来の森づくり基金報告  
北海道の森づくり交流会 2011  
コープ未来の森づくり基金 Report

## Starting Column 森づくりのトレンド

### 未来のための 市民による 森づくり

近年、人々の森林への関心が高まっています。例えば総務省が2007年に行った世論調査では、ほぼ100%の人が森に親しみを感ずると答えています。また、約8割の人が木材を使うことが森林の整備に役立つと答えています。テレビや新聞などでも森林がたくさん取り上げられています。森林の散歩や観察会など森林に親しむ機会もたくさん企画され、多くの人が参加しています。

一方で、森林をめぐる状況はどうなっているのでしょうか？

日本では戦後になって、木材生産のために活発に木を植えてきました。このように人によってつくられた森林は人工林と呼ばれ、適切な手入れが必要です。しかし森林所有者は林業から十分な収入が得られないため、森

林を管理する意欲をなくし、放棄してしまった森林もあります。北海道では個人や企業が持っている人工林の約三分の一が手入れ不足と推定されています。一方、多くの人工林は順調に育っていますが、十分利用されておらず、日本の木材自給率は3割以下です。

人々の関心は高い、でも森林はきちんと管理されているとはいえないし、森林資源は有効に活用されていると言えないのが現状です。市民の思いと実際の森林の姿、森林の利用には大きなギャップがあります。

こうした状況に対して、日本の森林政策に責任を持つ林野庁は自立した林業の構築をめざした森林・林業再生プランを推進しようとしています。これは、地域の森林管理を責任もって行

える人材の養成、森林に手入れをする基盤となる道路網の整備をしつつ、零細な所有者を集めて集約的・効率的な森林への手入れや生産活動を行って、自立した林業を確立しようとするものです。力強い林業の再生を目指すという面で画期的な政策です。ただ、「上から」の改革という性格が強く、先に述べた市民と森林のつながりの回復という視点は弱いのも事実です。また林業ばかり考えて地域社会と森林・林業のつながりを考えていないという指摘もあります。

それでは市民の立場からはどのような方向をめざすべきなのでしょう。一人ひとりの市民の森林への理解を深め、思いをはぐんでいくこと、そして森林や山村社会とのつながりを

くりなおしていくことだと思います。ここで重要なことは、植樹など森林づくりに直接貢献する活動だけではなく、木材など森林の恵みを使うことで森林づくりに貢献することです。木材は再生産可能な資源であり、また林業が活発化することで森林所有者は森林をきちんと管理する意欲がわき、山村社会も活性化します。また、石油などの化石燃料の代わりに木材を燃料とすることで低炭素社会の構築にも役立つことができます。市民がこれを認識して、地元北海道にある森林資源を積極的に活用することを通して持続的な森林管理を支えることが重要です。市民と森林・山村社会の新しい関係をつくる必要があるのだと思います。

「コープ未来の森づくり基金」はこうした新しい市民と森林の関係をつくることに貢献したいと考えています。基金は植樹、助成、学習という3つのプログラムからなっています。植樹活動は実際の森林づくりの第一歩となるとともに、組合員が森林づくりを体験する第一歩です。より深く森林とつきあうきっかけとなる活動です。助成活動は道内で森林づくりにかかわる団体へ財政的な支援をするものです。市民と森林をつなぐ多様な活動を行っている団体に支援を行っており、人間と森林の新たな関係づくりのお手伝いをしています。さらに学習活動では、次のステップへ進むためバネを蓄えます。

2011年1月29日には助成団体の活動報告会があり、団体同士の、

団体と組合員の交流が行われ、学びあい、刺激し合って次のステップを考える良い機会になりました。各地域で組合員と助成団体の交流が行われ、お互いに学びあうということが行われています。

基金では、このような3つの活動を有機的に連携させて新しいタイプの森林づくり活動を目指そうとしています。運動体としての生協の良さを生かしたユニークな活動にすることができると思います。

ただ、活動はまだ始まったばかり、まだまだ手探りの段階です。よりよい活動にしていくためには、たくさんの方に参加していただき、知恵を出していただき、実践を積み重ねていくことが重要です。皆さんもぜひご参加ください。✻



柿澤 宏昭  
(かきざわ ひろあき)

北海道大学  
森林政策研究室 教授

コープ未来の森づくり基金 運営委員長

1959年神奈川県横浜市生まれ。北海道大学大学院農学研究科修士課程修了。現在、北海道大学農学部森林政策研究室教授。

持続的な森林管理を多様な人々の協働で支えるしくみづくりをテーマに研究を行っている。また、欧米、ロシアなどの森林管理政策にも詳しい。主な著作に『エコシステムマネジメント』（築地書館）。2008年より「コープ未来の森づくり基金」運営委員長を務める。



# コミュニティ フォレストに 行こう

2010年度高額助成を受けた  
「苫東・和みの森運営協議会」が  
目指す森は「みんなの森」。  
誰もが“みんな”楽しめる森って  
どんな森なんだろう？  
“みんな”が目指す森づくり。  
関わる人たちの想いを追いました。

## 基金助成で設置した森のコンテナ

活動拠点として、苫小牧らしさを  
考えてコンテナを設置しました。  
ペイントは  
もちろん  
みんなです。



the  
community  
FOREST



新しい森づくり  
どんな挑戦をしているの？

## 苫東・和みの森 運営協議会

### それぞれのペースで 森を楽しむ

集まったのは子どもとお母さんと、車椅子ユーザーと… 一見どんな集まりなのか分かりません。そして参加者も三々五々、森に遊びに行く子もいたり、大人に混じって木道づくりでドリルを振る子もいたり。お母さんも昼食作りをしたり、森遊びについていたり、みんな楽しそうにそのひとときを過ごしています。

「月に1度は里山づくり」と名付けられたこの時間は、苫東・和みの森運営協議会（以下、和みの森）が進める森づくりのイベントで、この1年に8回行われました。でも、森づくりなのに、植樹や間伐などの森づくりを思わせる気配はあまりないのです。そこには和やかで温かく、楽しそうな空間がただ広がっているだけ。和みの森が目指す森づくりって、どんな森づくりなのでしょう。

実は和みの森は、誰もが森に入り、楽しめるようにするために林の中に木道を整備しています。それも自分たちで。森に行っただも達は遊びながら林床の木の枝を集めて木道予定地の整備をするし、

作業に慣れた参加者は間伐材で木道を作っていきます。みんなのお昼ご飯はお母さん達が和気あいあいと作っていて、森で好きずきで過ごしている様々な人みんなが、実は誰もが楽しむための森づくりに楽しく参加してしまっているのです。

### コミュニティフォレストの 森づくり

苫東・和みの森が目指す森づくりは、みんなの森「コミュニティフォレスト」。子どもや大人はもちろん、障がい者やお年寄りなどの色んな人が森に関わり、楽しむ。森からの恵みを享受できるようにみんなで森をつくる。そして新しいつながりを作る、社会の新しい役割を担う、そんな森がコミュニティフォレストなのです。

和みの森に集まる人々の作り出す空間は、もうすでに新しい出会いとつながりを生み出しています。森づくりが進み、つながった人々は、そして社会は、この先どう変わっていくのでしょうか。そこには様々な人が関わる森づくりが持つ、新しい可能性が見え始めているに違いありません。



①子どもノコギリを使って木道づくり ②森の中では木の枝で家を作って遊んでいるけど ③枝を拾い終わった場所には作った木道が並んでいくのでした

森であそぶの  
だいすきー



森と遠い人をつなげる  
様々な人が織りなす模様

●まずはディレクターの上田さんにお聞きします。和みの森のコンセプトについて教えてください。  
上田：「森がきれい」という人をどれだけ呼べるか。それがコンセプトだね。  
●分かりやすい…（笑）。  
上田：森に行く機会がない人がここにこに来られるか。行っちゃダメと言われてしまう子どもたち、それから車椅子の人とか。森に出会わせるということ、出会うはずのない人たちを会わせたい。  
万弥：私は（相原さんの）サポートで森に行くのとか木道づくりとか、最初すっごく嫌だったんだけど（笑）、だんだん大丈夫になってきて、今は行くのが楽しみだもんね。  
三上：何かきっかけがあったの？  
万弥：初めて山用の長靴を買ったから、それを使いたいのがあったかも。  
上田：そういう入り口があったのは大事だね。森嫌いの人が楽しみに来るようになるって意味で万弥さんの存在は重要なんだよ

●運営協議会はどんな人たちが構成されているんですか？  
上田：やっぱり森に行ったことのない人を中心に

声をかけたかな。それからデザイナーみたいな異業種。  
相原：僕は車椅子ダーツの普及活動をしていて、全国植樹祭で高橋知事と植樹をしたことで声を掛けられたんですけど、森にいた時すごくさわやかでモヤモヤが晴れたんだよね。それがダーツにもいい影響があって、森とダーツがつながるだろうということで運営協議会の会長を引き受けました。  
●そこでも色々な人がつながりを持つイメージなんですか？  
いつの間にか森づくり使うつながりを生かすこと  
●和みの森の活動について教えてください。  
菊地：私はいろんな森づくりにも行ってるけど、他のところだと、あれやりますよ、これやりますよ。って決まっているのに、ここでは子ども達が好きなことをして、お母さんも森に馴染んでリラックスして楽しんでる。それがとてもカルチャーショックでした。  
●子ども達が自由にしているのは、活動のプログラムがないということ

とですか？  
菊地：あるんだろうけどそれを感ぜさせない。子どもに選択肢があって、森遊びに飽きたら別のことをやる。木道づくりでちっちゃな子がドリル握ってたりするし。  
上田：ともちゃんはずっと木道作りでドリルやってたね。  
中村：娘よりも私が楽しんでやってね（笑）。ドリル楽しくて。  
●子どもも大人もやりたいことをしているって特殊ですね。  
上田：やってもいいし、やらなくてもいい。場と機会はある。でもそれは全て森につながっているというデザインはしているかな。  
三上：「NPOがやるだすきも、いくつかやることがあるから自由にどうぞ。っていう感じだったかな。パン焼いたり木道作ったりお芋焼いたり。イチゴ摘みに行きたい人は行くし、行きたくない人は行かない。  
●森づくりの現場って普通作業モードですよ。和みの森はそうではないとすると、どんな森づくりなんですか？  
相原：北海道には里山が無いって話を聞くよね。だから上田さんから里山づくりがしたいんだって聞いて共感した。自分でも行け

る場所で自由に遊べる森を作る。  
上田：遊びと森の仕事は別々では長続きしないと思ってさ、遊んでいたらいつの間にか森がお手入れされてた。っていう仕組みを作り

い森づくりになっているわけ。  
菊地：森づくりって大抵体験だけで、ぶつぶつ切れてしまっている。どの木を育ててどの木を伐って、それをどう使うの



木のようにちえん。単純な作業だけど、子どもの集中力が発揮される。

を今後も森づくりの場として有効に使いたいということから始めたのだけど、その現場には集まれるような場所とか、悪天候の時に逃げ込めるようなシェルターが無かったのさ。  
●それで拠点づくりが必要だと。  
上田：そう。で、コンテナデザイナー呼んでね。作る時にお願いしたのは、自分があたかも作ったという気になれることかな。アイデアフラッシュにしるコンテナを見に行くにしろ、自分がこれを作った感があることが大事だね。  
木村：このキツネ、僕が描いたんだよ。とか、このシカ私が塗ったと

上田：みんな、自分が作ったっていう自負ができたから、森に来るための必然性になったね。それから活動の拠り所。泊まりがけでひたすら森づくりなんてイベントもできるようになったよ。  
楽しいことに人が集まる仕組みがある  
●活動の拠点ができて、この先和みの森でやっていきたいことなどを教えてください。  
上田：ともちゃんとか、何をやってたら楽しいだろう。要望ある？  
中村：泊まりたいですよ。やっぱり泊まって活動したい。  
三上：個人的にはやっぱり焚き火。キャンプファイヤー。ぜひフォークダンスまで（笑）。  
上田：草木染めなんか面白いですね。薪ストーブでぐらぐらお湯わかしてさ。  
中村：イチゴとかハスカップはジャムとか？  
相原：お酒に漬けてもおいしいよね。漬ける期間で味が全然違うの。

全員：おいしー！  
木村：コンテナのところで話し合ってる、みんなで必要な物を作りましょうよ。壊れたらそれでキャンプファイヤー（笑）。なくなったら森の材料で作る。場所と道具があるだけでそんな森づくりのサイクルが生まれますよ。  
●森があると色々な人が色々な楽しみを作れますね。  
相原：楽しいことからたくさんの方が集まる場が生まれるよね。  
コミュニティフォレストが社会を変える力になる  
●人が集まる場としての和みの森は、これからの社会にどんな影響を与えますか？  
上田：バリアバリュー。小さい子が種を植えるのは大人がやるより効率がいいんだよ。小さい子って役に立たないと思われてる。マイナスでしょ？それが実はプラスになる。小さいから、体が悪いからできません。じゃなくて、だからこそできる。そういうシーンを



the community FOREST  
Crosstalk  
和みの森  
ってさ...  
森と人とか関わるとどんな未来が生まれるのか。北海道の森の新しいカタチとしてのコミュニティフォレストを目指す 苫東・和みの森に関わるみなさんと話してみた。

たかったのよ。  
●木のようにちえんっていうのも森づくりの一環ですか？  
上田：自分が育つと同じように苗が育つ。大きくなったら卒業するみたいに森に植樹する。というのが木のようにちえん。ちっちゃい子だとドングリ100個ずつと拾ってくれたり、飽きずにひたすら植えてくれたりする。狭い苗畑だからちっちゃい子のほうが作業効率がいいことがわかってさ、遊びがい

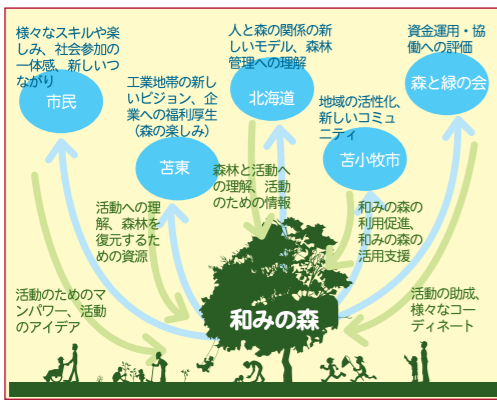
ていう循環した活動ができるのがすごいと思うし、楽しみ。  
木村：森との距離感・接しやすさことって大事だと思う。そこから興味を持った人が進んでいく、きっかけづくりなんじゃないかな。  
活動の必然性を生む 拠点づくり  
●そうした活動の中で、なぜ助成を申請しようと思ったんですか？  
上田：和みの森は全国植樹祭跡地

でもみんなが加われないからダメだし、よくある「みんなで作りました」という落書きみたいなものにはしたくないから、しっかりしたものでみんなが参加できるデザインは考えてプランを作りましたね。  
●コンテナができて活動は変わりましたか？



設置されたコンテナは活動の拠り所として活躍

森の中に作れたら、社会は確実に変わるよね。  
●自分の居場所と役割を見いだせるっていうことですか？  
上田：そう。教員だったころさ、周りにいじめられて「ここにいていいんだろうか」とって悩むが多かった。あなたがいてくれて本当に助かったよ。って見え



苫東・和みの森と様々な人々・団体が関わり、共に成長するイメージ（和みの森パンフレットより）

cross talk MEMBERS

和みの森に関わる様々な立場の人たちに集まってもらいました

Interviews with members: 木村さん (デザイナー), 上田さん (NPO法人ねおす), 相原万弥さん (サポーター), 菊地さん (スタジオとどき), 中村さん・ともちゃん (和みの森ユーザー), 三上さん (NPO法人がする), 相原さん (和みの森運営協議会会長). Each member has a quote about their experience with the forest.



るシーンを作りたい。  
菊地：田んぼをみんなでやったときもそう思いました。昔は家族みんなに役割があった。お年寄りでも子守りをしたり、落ち穂拾いをしたり。今は「効率」がそれを排除してしまっているよね。そういうことを伝えられる場所なんだって思います。

相原：僕は、健全な人格形成に役立てるんじゃないかと思ってる。自分たちの姿を見て、人間に対する思いやりとかやさしさを感じてくれればいいな。車椅子を見てかわいそうだって思う人が多いと思うけど、僕はこうやって活動している姿を見てもらうのが役割だと思ってるしね。

木村：大人になって休日に暇だからって何もしないで過ごすのか、やることを自分で見つけられるのかって、大きく違ってくる部分だよ。自分の意志でいるんなことに足を踏み出せる人を作るきっかけになるんじゃないかって感じますよ。

今は全てが与えられている時代で、公園だって、遊具にせよ山にせよ何かを意図的にさせるためにあるし、それに従うのが義務みたいに見える。何もないところから発想してそれを実現できることって大事だし、実はそれが一番面白いと思う。

中村：そういう意味では場と道具だけがあることって大事ね。ドリルを思う存分使ってもいいとか。木村：あれしなさいこれしなさいではなくて、興味を持てることって大事だよ。ドリルを使うことが楽しいんだと思えばそこから世界が広がっていく。きっかけづくりなんじゃないかな。

相原：そこから宮大工の丁稚奉公になっちゃったりとかね(笑)。

●コミュニティフォレストは人の居場所と未来を拓く森、ですか。

相原：いいんですよ、それ。▲



宮本英樹 (NPO法人ねおす)  
北海道らしい環境学習・エコツーリズムを推進する一方、地域づくりや木育、森づくり等にも積極的に関わる。北海道木育プログラム等検討委員会委員長。釧路町出身。

無縁社会という言葉がうまれたように、今、私たちは「つながり」感をなくしています。そのことが人の心や社会に暗い影を落しているようにも思えます。苦東・和みの森で始まったこの取り組みは、森づくりを通して、その社会的課題に取り組みようとしています。

日本は、いわゆる「木」「森」文化です。この新しい「つながり」の舞台に森が選ばれるのは自然の成り行きだったのかもしれない。人々がつながるためには、つながる者同士が何か共通する感覚を持ち合わせ、いなくてはならないからです。「森にいると気持ちいい」そんな素朴な共通感覚を通して彼らは異世代、異業種といった立場を越えてつながるようになっていきます。

また、同時に彼らは「森」ともつながろうとしています。人がふるさとといった「場」に「つながり」を持つためには、そこにはそれぞれの人の「居場所」がなくてはなりません。それは「出番」ともいえます。和みの森の取り組みでは幼児やハンディキャップのある人まで全ての人が森づくりに関わられるように工夫されている点がすばらしいと思います。また、そんな多様な課題を用意してくれる「森」やはり私たちのこころのふるさとなのでしょう。

今後、イギリスではじまった「コミュニティフォレストストーリー」のように「市民林業」へと発展していくのか、「シカゴ・パーク・ディストリクト」のような「市民への公共用地信託」に進むのか楽しみです。新しい手づくり「サロン」ができたことで次の展開が注目される「新しい森づくり」の形だと思えます。

### 北海道の未来の森とひとのために

コープ未来の森づくり基金は、基金単体で事業を行うよりも幅広く、細かい森づくり活動を支援できると考えて、森づくり団体への助成活動を始めました。また、交流会などを開いて森づくり団体同士が出会うことで、ネットワークが広がることも期待しています。

「苦東・和みの森」は2010年度の高額助成団体で、植林や育樹中心ではなく、森の中で人が集まるコミュニティとしての森づくりを進めています。特に子どもたちが森で居心地の良さを感じ、木を使ったり森で好きな事をして遊んだり、森でアクションをするという経験は、将来への大きな宝物になるのではないのでしょうか。そんな活動の中で、ひと休みしたり集まったりできる場所としてコンテナが設置されたのは、森での活動を広げるには重要なことで、助成が有効に使われたのは嬉しいことです。

森に入ると心が和んでストレスが減ると言われています。苦東・和みの森でも、これからより多くの人たちに、森での遊びや居場所を提供するように、活動を広げていって欲しいですね。

コープさっぽろ経営企画本部  
本部長 吉田 洋一さん



**苦東・和みの森 information**  
和みの森の活動に興味のある方はこちらにお問い合わせください  
〒059-1273 苦小牧市日吉町1-1-17  
080-3262-4739  
<http://nagominomori.no-blog.jp/weblog/>

### 森でつなぎなおす心と絆

### Intermediate Column 北海道の森のすばらしさ

東京からUターンして10年がたちました。北海道の自然に触れて暮らしたい、それがUターンの理由です。父親の転勤でオホーツクエリアを点々として暮らしていた子どものころ、保育園もない僻地での一人っ子の遊びは、自然のいのちとの遊びでした。花や草を使ったり、木に登ったり、蝶がさなぎから出てくるのを待ったり、ザリガニやドジョウを見つかけたり、浜辺で貝を拾ったり。犬や猫、羊やヤギといった動物を引き連れて、朝から晩まで外を駆けまわっていた、放し飼いの子ども時代でした。

当時はバブルへと続く高度成長期の真ただ中、環境だとか生物多様性だとかという教育はありませんでした。家の裏の大きな樹に毎日ガツガツと餌を食べにくる黒いキツツキに「朝からうるさいな」と文句を言ったりしていました。今はそれが「クマゲラ」という、写真家たちが探し求める希少な鳥であることを知っていますが、当時はどこにでもいるキツツキだと思っていました。

花々が咲き乱れる春の森も、水平線をうめつくす流氷も、あってあたりまえの自然、他の土地と比較することもなくそこで暮らしていました。

大学入学で本州に行き、そのまま東京で広告や福祉の仕事をしなが音楽活動をする日々の中で、自分がつくる歌の中に北海道のイメージが色濃く出ているのに気付いてから、自然の中の暮らしをもう一度取り戻したいという思いがどんどん大きくなっていきました。北海道を離れた時は、自然について特別な思いはありませんでした。一度離れて外側から眺めているうちに、いつの間にか、かけがえのない、記憶の中で光をあびた特別な場所になっていきました。それは「ふるさとだから懐かしい」という感覚とは少し違って、自分が日常的に接していた自然の美しさや豊かさが初めて見えてきたのです。

2000年秋にUターンして、札幌に住んで環境関係のNPOで働くようになりました。現在の職場であるNPO法人北海道市民環境ネットワーク

ワーク(きたネット)は、環境活動を支援する「中間支援組織」です。北海道に住んでいるみなさんに、私たちの隣にある自然はとても貴重で個性的な、大切なものであること、その自然を守り育てるために活動する人がいることを伝え、ひとりでも多くの人に伝えていくのが自分の仕事のひとつだと考えています。

きたネットには現在53の市民環境団体が所属しています。

# たかからもの森は北海道の

属しています。会員のみなさんと話してみると、リーダー格として活動している方に道外出身者が多いのに驚きます。北海道に憧れて北海道の大学に入って、そのまま残って環境保全活動をしているといった経歴の方が非常に多い。その方たちが自然を愛する地元の人たちと知り合って共感しあい、連携したときに、地に足のついた大きな力が生まれ、活動が動き出す、そういう印象をうけます。

この春、雪がとけたら、近くの森を歩いてみませんか。4月の終わりから5月には、スプリングエフェメラル(春のはかないのち)とよばれる花々が森をうめつくします。カタクリ、エゾエンゴサク、ニリンソウ…次々と

咲きだす花々、ほんの短い季節にだけ見ることが出来る北海道の春、半日の光で風景が変化していくその様子を、ぜひご家族の春の行事に加えてください。札幌のような都市でも、地下鉄の駅やバス停から15分も歩けば見ることが出来る風景です。この自然の身近さが北海道の「たかからもの」です。

野生動物との出会いを身近に楽しめるのも、北海道の森のすばらしさ。円山や藻岩山といった札幌の山々でも、エゾリスやエゾシマリス、エゾモモンガ、クマゲラといった動物が暮らしています。エゾシカやエゾヒグマ出没で悩んでいる方もいらっしゃると思いますが、大きな野生動物が人の住む場所のごく身近で暮らしている、そのダイナミックさも「たかからもの」といえます。世界を探しても、これだけ身近なところで自然体験ができる都市は少ないと思います。

スプリングエフェメラルの季節が終わると、森は山菜取りのシーズンに入ります。ほろ苦く豊かな北海道の春の味覚も「たかからもの」、誰が植えたわけではない山野草を育てているのは北海道の森です。春を楽しみながら、この森の恵みを10年先も100年先も、北海道暮らしの醍醐味として、未来に残していくためには、どんな行動、どんなルールが必要なのかを考えていくことができればとてもうれしいことです。

北海道だからこそできる自然と近い暮らし、たとえば自分たちがど根掘りから育てた苗がすくすく育って春に芽吹く、未来の森をつくる喜びもそのひとつです。自然とともに暮らすライフスタイル、カレンダーを持って、北海道暮らしをいっしょに楽しんでいきましょう。それが「モリイク」発刊にあたっての、環境保全に携わるひとりとしての願いです。▲

宮本 尚 (みやもと なお) NPO法人北海道市民環境ネットワーク「きたネット」理事



オホーツク出身、東京での生活を経て、札幌市在住。コピーライター、心身障害児(者)の介護・マネジメントなどを経て、現在は「NPO法人北海道市民環境ネットワーク」理事・事務局。シンガー・ソングライター。生年月日はあえて書かない主義。趣味はカメラを持って森を歩くこと。非常に手のかかる猫2匹と共生中。



のぞいてみたら何かがいるよ。  
ちょっとキモいわない？  
よく見るとおもしろい！  
さがしてみよう、森のいきもの。  
ほら、いのちのふしぎにあふれてる。

**木**にある様々な不思議と面白さをご紹介します。それがどんなに不思議で面白いか確かめに行きましょう。森を知り、好きになるきっかけになるかもしれません。

おもしろいろいろ  
その1 イモムシケムシ

顔も体も  
いろいろちがうよ



大きな角が  
りっぱだね

日本の国蝶 オオムラサキの幼虫



ふさふさ毛皮がおしゃれでしょ？  
ヒトリガの幼虫

ネコみたいなお顔しているよ！  
ヒメジノメの幼虫



みんなが安心  
ケムシのアパート

糸でおうちを作って  
集団生活  
オビカレハの幼虫



頭がまるで  
テントウムシ  
タテスジシャチホコ  
の幼虫



変身の修行も  
いろいろ

身を守る  
くふうもいろいろ

いらかの幼虫

ハテハテトゲトゲ

いっはいのトゲは  
「主があるから  
近づかないで」  
のサイン

**イモムシ・ケムシ**は、チョウチョやガになる子どもです。小さい体はとっても、か弱い。だから鳥やケモノ、虫たちから身を守る姿をしています。ほかの虫や葉っぱに変身する忍者イモケムに、毒や角で「近づかないで」と言ってるような変顔イモケム。あなたが見つけた一匹はどんな姿をしているかな？

イモケムに  
だったら  
モリどうたあう

イモケムワルワル  
作詞 作曲 宮本尚

のんびりゆたゆた

みどりのこかげで もくもくもく  
ちいさなモンスター もくもくもく  
イモケムドレスはちょっとキモイキレイ  
ねえほんとのおめめは これそれどれ

©nao miyamoto



いよいよ  
ちょうちょう

たまごで  
はじまり

あおむし

もくもく ①

みどりのこかげで もくもくもく  
ちいさなモンスター もくもくもく  
イモケムドレスはちょっとキモイキレイ  
ねえほんとのおめめは これそれどれ

②

はっぱにあけたまどから キラキラキラ  
ひかりのダンスに ソワソワソワ  
おとなになったら フワフワフワ  
そらにのぼるかいだん もくもくもく

③

イモムシケムシが もくもくもく  
まほうがはじまる ブルン ブルン ブルン  
もうすぐそらだよ Are You Ready? OK!  
さあとびだせおどりだせ I'm OK ムシワルツ



イモムシハンドブック

安田 守 [著] 中島秀雄・高橋真弓 [監修]  
文一総合出版 (1,470円)

ずらっとならんだイモムシケムシはカラフルな列車の図鑑みたい。どうしてこんなカタチなんだろう、森のかみさまのいらすらかな。キモチわるいんだけどつい見てしまっ、アートな姿が忘れられなくなる。虫がにがてな方は多いとおもうけど、イモケムの形には「生きる」ためのちからがあふれてるんです。まさに、みんなちがって、みんないい。

イモケムの本

いもむしれっしゃ にしはらみのり [著]  
PHP研究所 (1,260円)

いもむしれっしゃ登場。がたんもよん、がたんもよんと、たくさんの虫たちをのせてすすみます。次のいしや駅は「はらっぱ団地」、駅には駅弁、モグラちかがいではアイスクリームも売ってます。次の駅はどんなばしょかな、何がおこるかな。都会のこどもたちを、森やはらっぱのおもしろ体験につれていってくれる絵本。虫博士をめざす子にもおすすめです。



はらべこあおむし

エリック・カール [著] もり ひさし [翻訳]  
偕成社 (1,260円)

エリック・カールの名作、イモケムえほんのスタンダード。イモムシケムシは食べることが仕事。食べて食べて大きくなる。葉っぱからチェリーパイ、ソーセージまでたべちゃう。ほんもののおむしは何を食べるかしてるかな？ 森にでかけてしらべてみようか。この本でそだったこどもたちに、キモイキレイな森のいきものリアルなおもしろさを伝えたいな。



event

# 北海道の森づくり交流会 2011

2011年1月29日(土) 13時~15時  
コープさっぽろ本部会議室



テレビ会議システムを使用して全道7カ所の会場にライブを伝えます。



講演を真剣に聞いてこれからの森づくりに関する考える皆さん。

北海道の森は未来につなぐ宝物。基金の助成を受けた道内の森づくり団体が集まり、助成授与式や講演を通じて、北海道の森づくりの未来を語りました。

2011年度の助成団体を中心に、コープさっぽろ本部および全道7カ所の会場に集まったのは180名近く。北海道の森づくりは何を目指すべきなのか、講演と活動の事例報告が行われてその方向性を考えました。授賞式では受賞13団体が目録を受け取り、これからの活動についてお互いの意見を交換して交流を深めました。これからの北海道の森づくりにとってひとつのステップとなった1日でした。



森づくり団体からの活動報告で伝えられた山の道づくり。



受賞団体の記念撮影。これからも森づくりのつながりを広げてください。

## 講演 01 NPO法人北海道市民環境ネットワークきたネット理事 宮本 尚氏 北海道の森のすばらしさ、知ってほしい

きたネットは、北海道の環境団体を支援する活動をしています。会員団体との協働で「ラブアースの森づくり」という植樹活動も行っています。



私はオホーツク出身で、東京で約20年暮らしていました。東京で密集した住宅地から街のオフィスに通う生活を何年か続けていたら、だんだん精神的に不安定になりました。そこで、井の頭公園という武蔵野の雑木林がある公園のそばに引っ越して、毎日公園を散歩して仕事に行くという生活にして調子が戻ったという経験があります。その後、Uターンして環境保全活動に関わってみて、北海道の森は道民のすばらしい財産だと実感しています。

北海道には世界の1/700の森林があります。カナダ北西地方のヒグマは1頭が1000km<sup>2</sup>以上の広大な面積をテリトリーにしているという調査がありますが、知床のヒグマは15km<sup>2</sup>ほどで生きているそうです。つまり、それだけ北海道の森が豊かなんです。北海道に住んでいても、ホテルや天の川をみたことがない、森に行って何を遊ばばいいの?という方もいるようですが、これはとてももったいない、もっと自然の豊かさを楽しんでほしいと思っています。

きたネットでは2010年からコープさっぽろの森づくりをお手伝いしています。組合員さんはとても環境意識が高く、特に「あすもりサポーター」(※1)のみなさんは環境勉強会や活動に熱心です。環境団体のみなさんの思い

が伝わりやすい方たちです。組合員さんたちは、各地域で森づくりに関わる「ふれあい活動」(※2)を実施していくと聞いています。環境団体は、高齢化や人手不足、地域住民とのつながりを作れないなどの悩みを持っていますが、今日の交流会を通じて、各地の組合員の方々によりパートナー、プラットフォームになってもらって、道民のみなさんに北海道の環境の価値を伝える新しいルートを作ることができると思っています。道民みんなが北海道の森を宝物だと思って大切に、それが環境行動になって行くようなつながりを作っているのではないかとイメージです。

## 講演 02 北海道大学森林政策学研究室教授 コープ未来の森づくり基金 運営委員長 柿澤 宏昭氏 人と森をつなげることがあすもりの役割

全国での人の森への意識を調べると、森づくりに興味がある、参加したいなど、関わりたいという思いが強く、また、住民が費用を負担して森林整備をしてもよいという意向も持っていることがわかってきました。一方で木材が産業として成り立っていないかったり、所有者が高齢化するなどの問題で植林や育樹などの森づくりは進まず、放置林が増えています。また、国産材利用や森林認証材利用がなかなか進まないなど、消費者の森への思いと日常生活・消費生活とのギャップがあります。国の政策としては「森林・林業再生プラン」を掲げています。これは、補助金漬けだった林産業の自立再生と木材自給率50%を目指すというものです。



森林所有者、地域社会の人々、NPOや市民

の人々が議論を重ねて、産業基盤だけではなく、環境や楽しみにも貢献できる北海道の森づくりのあり方をかたちづくっていくことが大事だと思います。

コープ未来の森づくり基金は、植樹・助成・学習の3つの柱で活動しているのが大切だと思います。組合員が参加できる活動体で、参加から新しい活動も始まるでしょう。森と人との線を束ねて太くしていく、木を育てるとともに木を使って循環をつくりあげていく。そんな運動を広げて、協力し合えばみんな楽しい、人もまちも元気になる、誰もが笑顔で過ごせるような森づくりをしていけたら良いですね。

それには人と人、人と森のつながりが大切で、この交流会がひとつのステップになったらよいと思います。

## 事例 01 NPO法人ねおす 苦東・和みの森ディレクター 上田 融氏 拠点をつくったことで森づくりの幅が広がった

現場が苦小牧に近いという点や、誘われれば参加するというニーズから、ベースキャンプなどの活動の拠り所を作れば森づくりに参加してくれる人が増えると考えました。加えて苦小牧らしさや土地の制約からコンテナを設置して拠点として活用することにしました。



設置やペイントにはデザイナーと市民など色々な人が関わり、森に来る必然性を作ることができました。また、設置によってコアメンバーを創出できたこと、多様な参加者を確保できたこと、多様な森づくりのスタイルを

作れたこと、新しい形でのつながりと活用の形が生まれたことなどの効果がありました。

今後はより多様な人の参画、1年を通じての活動の計画を作る、苦東の企業を巻き込んだ活動を広げるなどの課題があります。

## 事例 02 NPO法人森林再生ネットワーク北海道 陣内 雄氏 山に道を作ることで、町医者のように相談を聞くこと

NPO法人森林再生ネットワーク北海道 「もりねっと」は、森づくりのつなぎ役を目指しています。



山の持ち主さんから、山がどういう状態なのかガイドしてほしい、生物多様性を高めたい、など森の活用の相談のニーズが寄せられています。相談をしたいけれども、窓口が分からなかったり、望むような答えが返ってこなかったりということがあります。

山主さんがどんな夢やニーズを持っているかお聞きしながら現場を見ますが、簡単には山に入れない状態のことがほとんどなので、道づくりも重視しています。道をつけて山に入ると、自分の山がこうなっていたんだと、ようやく山主さんが状態を知ることができ、次に何をしたいのかを考えることもできるようになります。そして、どうやって手入れするかプランを一緒に立てます。山にやさしい道づくりや、天然林施業の研修も行っています。

活動を通して分かったことは、山主さんの多様なニーズがあること。NPOはいわば町医者のように、大体の症状を聞いてカルテを書く、森林組合などは大きな施業を担当するというように、役割分担して対応していただけるのではと考えています。



## 北海道の美しい森を持続させるために

～コープさっぽろ大見英明理事長による開会の挨拶より～

### 組合員の皆さんとお付き合いが広がるとよい

2008年のサミットを契機として、環境への取り組みを生活協同組合の運動として続けて行こうと思ったとき、何ができるのかと考えて、レジ袋を削減していくことになりました。2008年から、お客さん一人来店で0.5円を基金に拠出するというので、来店が増えれば増えるほど基金も増えるという仕組みになって

います。年間3000万円の基金になるので、単独で事業を進めていくよりも広く道内で草の根で活動されている人たちに対する助成もあっていいと考え、助成を開始しました。今日は今年で3年目、3回目の贈呈式となりました。コープは組合員さんと活動していますが、みなさんのおつきあいや関係性が広がり、北海道全域で森と木を作っていく。そういう裾野が広がるというのは喜ばしいことです。

### 育てるだけではない 使うことで循環再生を

北海道の林業が、これはカラマツ材中心の植生ですが、林産資源の有効活用をどうするのかという問題があります。木をつくるだけでなく、どう有効に活用されるかを通して北海道の森が保全されると思うのです。今までは植樹をするということを中心に取り組んできましたが、ここからは林産資源を有効に、循環的に

再生され、維持されるということを考え、その生成物をどう楽しく活用するかを考えていければよいと思っています。

昨年10月に開店した西宮の沢店は足寄町のカラマツ間伐材4500本を使用した完全木造建築のお店です。道内の林産業はこの30年間で大きく衰退しました。私たちは食を中心しながら食の循環をどう作っていくのか、維持継続循環をどう図るのかの中で活動してきましたが、

同じように環境の森づくりにしても同じような視点で実践し、2号店、3号店を作ることで環境にやさしく、林業の振興にも貢献するやり方を追及していきたいと思っています。

北海道の環境は非常にすばらしい。日本の中でも貴重な北海道の環境をばくむという観点からも森づくりの活動の裾野がもっと広がることを期待しています。

# Report コープ未来の森づくり基金 活動 Report



**北見・美幌町**  
6/19 0.2ha 70名  
カラマツ 400本

**函館・知内町**  
5/16 0.14ha 93名  
ミズナラ・アオダモ・キタコブシ・ハリギリ・ホオノキ 280本

**帯広・上士幌町**  
6/20 0.2ha 59名  
ナナカマド 400本

**苫小牧・むかわ町**  
5/22 0.2ha 71名  
カラマツ 440本

**釧路・白糠町**  
5/30 0.2ha 98名  
トドマツ 400本

**旭川・東川町**  
10/30 0.2ha 34名  
イタヤカエデ・ナナカマド・ミズナラ 400本



**札幌・当別町道民の森 神居尻地区**  
5/29 0.4ha 250名  
ミズナラ・シラカンバ・カツラ・ハリギリ 1200本

**合計 (2010年度)**

植樹面積	1.74ha
植樹本数	3920本
参加人数	735名

**凡例**

地区名・協定市町村	
実施日 (O/O)	面積 (ha)
参加人数 (名)	種類 (トドマツ)
	植樹本数 (本)

🌲 協定植樹地

## 組合員さんと一緒に森づくりをしています

2008年にコープ未来の森づくり基金が設立され、「全道各地で植樹をしよう!」と北海道と「森づくり協定」を締結。その実現に向けて準備を進めてきました。組合員さんの手によって植樹を行うコープの森は2008年の当別町道民の森に始まり、2009年には美幌町。そして2010年には、知内町、豊浦町、むかわ町、上士幌町、白糠町、東川町が加わり、全道8カ所で植樹祭が開催され、全道植樹が本格的にスタートしました。

植えられた木は、ミズナラ、シラカンバなどの広葉樹やトドマツなどの針葉樹など、全部で11樹種。約4000本の苗木が

700人を越える組合員さんの手で植えられました。

これらの植樹地では、それぞれ5年間、継続的に植樹をするとともに、植えてから4年間は下草刈りといった手入れを行い大切に育てられます。今年も5月中旬から6月にかけて、各地区で植樹祭が開催される予定です。(※一部秋植えの地域があります。)

また、各地区で組合員さん主催のふれあい企画を開催しました。道内各地の森や自然とのふれあい企画が開催されました。植樹から一歩踏み込み、より森を理解する活動も全道で広がっています。

みなさんも一緒に未来の森づくりに参加しませんか?

## 開催ふれあい企画

実施日	地区	企画
9/1	全体区	北海道の自然を感じよう
9/28	札幌東	ちょびエコ隊P3
9/28	札幌西	環境と歴史と味覚の旅
9/30	釧路	環境ミステリーツアー
10/11	函館	2010年 大きなあ〜れ 未来の森
10/26	札幌東	ちょびエコ隊P4
12/4	帯広	冬の森企画 「冬の森とふれあおう」

## コープ未来の森づくり基金 助成報告

2011年度コープ未来の森づくり基金助成募集には28団体(小額20団体、高額8団体)の応募がありました。厳正なる審査の結果、下記の団体に助成いたしました。助成は毎年8月~9月に募集しています。

高額助成	小額助成
NPO法人新山川草木を育てる集い	NPO法人北広島ボランティア・メイプル
NPO法人森林遊びサポートセンター	間伐ボランティア「札幌ウッドーズ」
特定非営利活動法人 サロベツ・エコネットワーク	NPO法人ピオトープ・イタンキ in 室蘭
	河川愛護団体 リバーネット21ながめま
	コンサ百年の森づくり実行委員会
	NPO法人美林舎
	特定非営利活動法人 En Vision環境保全事務所
	当別森林ボランティア「シラカンバ」
	空知森林サポーターの会
	自然・文化創造工場北海道事業部

## コープ未来の森づくり基金 収支報告

2010年度は全道での植樹祭に加え、西宮の沢店での記念植樹や、北海道漁連の魚付林植樹への支援などを行い、また、基金のパンフレットやポスターを初めて作成し、知らせる活動を強化しました。

レジ袋辞退による組合員さんからの積み立ては1日65,000円となりました。また、10月~11月に実施したエコ商品への協賛金は530万となり、予算に対して多くのご協力・ご協賛を頂くことができました。

	2010予算	2010見込
レジ袋辞退	24,100	23,715
エコ協賛金	1,700	5,298
企業協賛	0	112
収入計	25,800	29,125
植樹活動費	8,000	4,660
助成・魚付林	13,000	9,071
組合員企画	3,000	2,183
広報費	8,000	7,160
研究活動費	600	206
基金運営費	3,200	6,173
支出計	35,800	29,453

(単位:千円)

## ECO-OP 西宮の沢店 記念植樹祭



2010年9月23日。札幌市西区の、ECO-OP西宮の沢店オープンに先立ち、記念植樹祭を開催。地域住民118名の手によって、ハシドイ48本が植えられました。ハシドイは北海道在来のライラックの仲間。6~7月に白い花を咲かせます。コープさっぽろ西宮の沢店は国内初木造建築による環境配慮型のエコ店舗として、植樹された木とともに地域に根ざしたお店作りを進めています。

## 北海道ぎょれん「お魚殖やす森づくり」をサポートしています

コープ未来の森づくり基金では、北海道ぎょれんがすすめている魚付林植樹、「お魚殖やす森づくり」を支援しています。2010年度は全道21団体、約11300本の木が植えられました。魚付林は陸地の土砂の流出を防いだり、貝や昆布に必要な栄養素の供給源となるなど、北海道の水産資源を守るためにはとても大切な森のひとつです。

所属	日時	関係/人数	植樹種/本数	所属	日時	関係/人数	植樹種/本数
野付漁業協同組合 JF野付女性部	6/12	漁業関係者他 89名	シラカバ 計500本	網走・西網走漁業協同組合 JF網走・西網走女性部	6/18	漁業・農業関係者 91名	ヤチダモ・カツラ・ハルニレ ケヤマハンノキ 計250本
浜中漁業協同組合 JF浜中漁協女性部	5/26	漁協・林業・農業関係者他 171名	グイマツ・ミズナラ 計800本	標津漁業協同組合 JF標津女性部	5/25	漁協・林業・農業関係者他 340名	ヤチダモ・ハルニレ オニグルミ・エンジュ カツラ 計2500本
散布漁業協同組合 JF散布漁協女性部	5/29	漁業関係者他 58名	カンワ・ミズナラ 計200本	昆布森漁業協同組合 JF昆布森漁協女性部	5/31	漁協関係者・小児児童他 113名	サクラ・ミズナラ 計168本
香深漁業協同組合 JF香深女性部	10/18	漁業関係者他 25名	ダケカンバ・ミズナラ・イタヤカエデ 計500本	広尾漁業協同組合	5/22	漁業関係者他 41名	サクラ 計30本
利尻漁業協同組合仙法支所 JF利尻漁協仙法支所女性部	10/22	漁業・林業関係者 22名	エゾヤマザクラ・ダケカンバ ナナカマド 計220本	えりも漁業協同組合 JFえりも女性部	5/27	漁協・林業・農業関係者他 220名	エゾヤマザクラ トドマツ 計400本
利尻漁業協同組合鬼脇支所 JF利尻女性部鬼脇支所	10/8	漁業関係者他 60名	エゾヤマザクラ・ハンノキ ダケカンバ 計300本	鶴川漁業協同組合 JF鶴川女性部	5/9	漁業関係者 80名	ミズナラ 計900本
利尻漁業協同組合香形支所 JF利尻漁協香形支所女性部	5/29	漁業関係者他 58名	カンワ・ミズナラ 計200本	苫小牧漁業協同組合 JF苫小牧女性部	6/6	漁業・林業・農業関係者 130名	アカエゾマツ ミズナラ 計1000本
稚内漁業協同組合 JF稚内漁協女性部	10/25	漁業・林業関係者他 21名	エゾヤマザクラ・ケヤマハンノキ ナナカマド・ダケカンバ 計150本	いぶり中央漁業協同組合登別支所 JF女性部登別支部	5/7	漁業・森林関係者他 43名	ヤエザクラ 計80本
雄武漁業協同組合 JF雄武女性部	5/15	漁業関係者他 33名	アカエゾマツ 計600本	いぶり噴火湾漁協豊浦支所 いぶり噴火湾漁協豊浦地区女性部・礼文地区女性部	5/31	漁業・林業関係者他 70名	アオダモ・カツラ 計300本
紋別漁業協同組合 JF紋別女性部	6/1	漁業・林業関係者他 97名	シラカバ・マツ 計1250本	上磯郡漁業協同組合はまなす支所 JF上磯郡漁協女性部はまなす支所	4/20	漁業・林業関係者他 37名	ケヤキ 300本
	5/9	漁業・林業関係者他 350名	イタヤカエデ・ナナカマド シラカバ・グイマツ・クロエゾマツ ミズナラ 計350本	上磯郡漁業協同組合上磯支所 JF上磯郡漁協女性部上磯支所	4/21	漁業・林業関係者他 30名	スギ 300本



植樹の様子  
左から JF昆布森漁協女性部、JF稚内漁協女性部、JF香深女性部、JF利尻漁協香形支所女性部